群教セ	E04 － 06
	平24.247集

平成24年度長期社会体験研修報告書

研修先：株式会社　上毛新聞社

長期社会体験研修員　西原　敬之

Ⅰ　株式会社　上毛新聞社における研修について

１　研修内容

(1)　研修先の概要

上毛新聞社（図１）は明治20年（1887年）に創刊し、朝刊のみで発行部数は約31万部。県内シェア４割以上を誇る。業界でも珍しい本紙とスポーツニュースの２部構成となっている。県内ニュースが中心で、県外ニュースは共同通信社からの配信を受けている。20の支局や支社を持ち、地域密着の紙面づくりを心がける。近年、通信事業の多様化に伴い、ネット関連の配信にも力を注いでいる。

図１　上毛新聞社本社

(2)　主な研修内容

①　新入社員研修【４月２日～４日】（研修場所：本社）

新入社員入社式に参加。編集局長や広告局長ら幹部による会社概要や関連企業の説明、記者としての心構えについて講話を聞く。

②　前橋支局での研修【４月６日～５月30日】（研修場所：前橋市役所内記者クラブ）

前橋市内の催し物などを対象とした記者活動（掲載された新聞記事から抜粋　図２～４）

目引く魅力の造形

図２　立体作品展

共愛学園の歴史刻む

客員教授 宮崎さん 支えた25人1冊に

図３　大学教授が本を出版

鶏で不条理や自然破壊表現

前橋 新井さん木版画展

図４　木版画展

③　運動部での研修【６月１日～】（研修場所：本社）

県内スポーツ関連を対象とした記者活動

（掲載された新聞記事から抜粋　図５～７）

石井 太田 男子 トップ通過

折茂 伊勢崎 女子

県アマゴルフ予選

図５　県アマゴルフ大会

初 全国切符

大泉 FCクワレンタ

図６　シニアサッカー大会

シード撃破

高商 完勝

図７　全国高校野球選手権大会県予選

④ 記者活動に共通した研修内容

ア　取材依頼や催し物の案内、大会要項の確認
イ　取材の事前準備、取材日程の打ち合わせ
ウ　取材先で対象者から話を聞き、取材内容に合った写真を撮影
エ　原稿を書き、写真を選定
オ　原稿を記者やデスクに確認してもらい推敲
カ　校正し出来上がった原稿と写真を本社デスクに送信

２　研修成果

(1)　前橋支局における研修より

4 月 2 日から 3 日間、本社で新入社員と一緒に研修を受け、4 日目から前橋支局での勤務となった。はじめの 2 日間は入社 2 年目の記者に同行し、取材の仕方や写真の撮り方、記事の書き方を教わった。研修 6 日目からは、一人で前橋市内の絵画や書道、陶器などの展示会を中心に取材に出かけた。取材前は、行き先までのルートや作品の特徴を調べ、類似した過去の新聞記事を探し読んだ。取材先では、メモを取るのが遅いためボイスレコーダーにインタビューを録音した。取材不足で記事が書けないときは、取材先に電話し再度話を聞かせてもらった。取材対象者から話を引き出すためには、「まず人間関係づくりが大事」と記者から教わった。

支局に届いた催し物の告知や募集に関する記事も書いた。記事は、その日のうちに短時間で書き上げなければならないため、効率よく書けるように工夫した。書き上がった原稿は、すぐ記者に見てもらった。今まで学校の通信で書いてきた文章とは書き出しからまったく異なり、慣れるのに時間がかかった。それでも、記者の方々は丁寧に教えてくださった。原稿の書き出しや多様な表現を心がけること、会話文の使い方など学校現場でも応用できると思った。

(2)　運動部における研修より

取材対象はスポーツ全般である。ゴルフなど自分の知らない競技については競技ルールなどを事前に調べてから取材に出かけたが、それでも試合の勝負どころやどんな動きがすぐれたプレーなのか分からなかった。スポーツは動きが速く、決定的瞬間は一瞬のため撮影も難しかった。夏の全国高校野球選手権大会県予選では猛暑の中、終日スタンドで取材した。このような体験をしていく中で、記者から「選手のプレーや結果、記録を記事にするだけでなく、スポーツを通してその選手の人柄や競技に向かう姿勢、生きざまを記事にするのだ」と教わった。それからは、どんな競技でも選手に会うのが楽しみになり、競技に対する姿勢や努力、その成果としての大会結果など興味深く取材できるようになった（図８）。カメラの使い方や写真の構図などは写真部のカメラマンに教えてもらった。記事にする内容や情報の選び方、写真の撮り方なども学校現場で生かせると思った。

図８　高校野球で取材の様子

運動部記者の大事な仕事の一つに、大会結果の記録打ちがある。例えば陸上競技なら男女別、種目別に着順、フルネーム、所属校、記録を打ち込む。汗水流して掴んだ記録の掲載を楽しみにしている読者が多くいる。計4500字以上にもなる長い記録もあり集中力と根気を要するが、1字たりとも決して間違えることは許されない。記録を打ち込んだら、複数の記者と必ず読み合わせをして出稿する。学校現場でも子どもの名前や成績を間違えることは決して許されない。細心の注意を払わなければならないと再認識した。

記者として一人前にはほど遠いが、自分の記事が掲載されると達成感を味わえる。掲載された記事を読んで、取材対象者から喜びの電話をもらい勇気付けられることもあった。記者活動をする中で、次の７項目の大切さを実感し、常に念頭において勤務した。

〇指示待ち族にならない（主体性）
〇できない理由を考えるのでなく、どうやったらできるか考える（課題解決力）

○あいさつ、積極的にコミュニケーションを図る（人間関係づくり）
○知識を広げ、驚きと感動を持つ（好奇心）
○強靭な体力や精神力を持つ（健康）
○何度もチェックし曖昧さを残さない、思いこみは禁物（完全性）
○失敗から学び、常に邁進する（打たれ強さ）

また、中・高校生の大会では教え子に会うこともあり、子どもたちの成長した姿に感動することが幾度もあった。活躍する教え子の姿を見ていると、部活指導や進路指導など中学校教師が担う責任の重さを痛切に感じた。異なった職種での研修により、教師の仕事の奥深さにあらためて気付いた。取材先で多くの人々と出会う中で、今、子どもたちに身に付けさせたい資質や能力は、「好奇心」「コミュニケーション能力」「責任感」「健康」であると感じた。

Ⅱ　学校教育での活用について

以下は、研修先における研修成果の中から一つを取り上げ、学校教育での活用について具体的に記述したものである。

１　研修主題

教師、子ども、保護者をつなぐ通信づくりのノウハウ
―　　新聞社での体験を通して　―

２　研修主題設定の理由

(1)　通信づくりのノウハウをまとめる意義

中学校学習指導要領（平成 20 年７月）の「総則」第４、指導計画の作成に当たって配慮すべき事項（3）では「教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てる」、(14) では「学校がその目的を達成するため，地域や学校の実態等に応じ，家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」とある。

学校の通信は、子どもや保護者に学校の様子を知ってもらい、学校教育に理解を深めてもらうツールである。さらに教師と子ども、子ども同士、教師と保護者の共感の輪を広げ、信頼の絆を深めることにも力を発揮する。新聞は事実を正確に伝え多様な考えを示すことで、社会をよくしたり、対象者を応援したり、人と人をつないだりする力を持っている。新聞社で学んだことを生かして、子どもや保護者との絆を深める通信づくりのノウハウをまとめることは価値あることである。

(2)　教師、子ども、保護者をつなぐ通信

① 子どもの長所探しは、教師の思いや愛情、メッセージを伝えるラブレター（教師と子ども）

通信は、教師の愛情いっぱいのメッセージを形にして届ける絶好の手段である。子どもや保護者は、紙面に自分のことや我が子が登場するのを楽しみにしていることも多い。日頃から一人一人の個性を認め、子どもの長所を発見することで「認められるからがんばろう」と励みになり、「こういう事もやってみたい」と次の目標設定にもつながる。

② 仲間やクラスへの愛が芽生える（子ども同士）

生活ノートに書かれた子どもの思いや前向きな意見、感想などを取り上げクラス全体のものにしていくことで「友達はそう考えていたんだ」「みんな頑張っているんだ」とお互いに認め合い、豊かな人間関係を築くきっかけとなる。また、紙面を通して、相互の理解だけでなくクラスに対する理解も深まる。授業や話合いの様子、仲間同士のやりとりなども載せることでクラスがまとまり、規律や責任感が生まれる。「このクラスが好き」と仲間やクラスを愛する心が芽生えるきっかけになる。

さらに、クラスの課題を明確に提言することで、子どもや家庭との関係、子ども同士の人間関係などを良好にし、学級・学年・学校経営に活用できる。

③ 保護者との架け橋（教師と保護者）

保護者が学校のよき理解者となって、家庭で子どもに励ましやアドバイスを与えてくれるようになると子どもへの教育効果はより大きなものとなる。学校の様子は、一般的に子どもの口などを通してでしか保護者に伝わらないものである。通信を使って授業や学校生活、行事の様子など事実を正確に伝えたり、教師の思いを伝えたりすることは大変重要なことであり、保護者との架け橋となる。

３　活用の内容

(1)　通信づくりの基本

子どもや保護者から喜ばれる通信をつくるには、新聞社での研修を通して次の４項目が重要と考える。A 記事にする内容や情報の選び方、ネタの拾い方　B 記事の書き方　C写真の撮り方　D読みやすい紙面づくりである。慣れないと通信づくりは大変だが、ちょっとしたノウハウを知ってると短時間で効果的なものをつくることができる。ここでは、上記のＢとＣの要点を取り上げ、A ～ D の詳細は資料編に掲載する。

(2) 通信づくりのノウハウ

① 記事の書き方

【記事を書くポイント（研修を通して学んだこと）】

ア　書けないと思っても、まずは書いてみる	イ　第１段落に必要なことを入れる
ウ　多様な表現を心がける	エ　会話文をうまく取り入れる
オ　好奇心をもって書く	カ　書いた記事は必ず確認する
キ　名前や年齢は再度確認する	

ア　「うまく書けない」と思ってしまうと文章を書くことが大変億劫になり、苦痛となる。うまく書けなくてもいいから、とにかく書いてみる。何を書きたいのか簡単にメモし、大まかな構成を考えてから書いてみる。書き始めると軌道に乗ることが多い。一通り書いたら、もう一度構成を考え直し全体を整える。始めからできない理由を考えるのでなく、どうやったらできるか考える。

イ　第１段落に主張したいこと、興味深いこと、面白いこと、感動的なことを書く。2 段落目からは 1 段落目に書いたことについて詳しく書いたり、説明を加えていくことによって、読み手を引きつける記事となる。

ウ　通信をつくっていると「小林くんは頑張った」「田中さんもすごく頑張った」と同じフレーズになってしまうことがある。「頑張る」の別の表現を調べると「精をだす」「汗だくになって」「気張る」「奮い立つ」「闘う」「気を吐く」「健闘する」「力をふりしぼる」「意地を見せる」「踏ん張る」「ベストを尽くす」「努力する」「自らにムチを入れる」「挑戦する」「熱心に」「一生懸命に」「へこたれないで」「くじけず」「全力をあげて」「曲げないで」「食い下がり」「気を吐く」などたくさんある。前後の文章に合う表現を選べば「頑張ろう」一辺倒の貧弱な文章から脱却できる。

エ　言いたいことやポイントとなる言葉を会話文の形にすると信憑性があり、重みが出てくる。

（例）Ｂくんは、毎朝走る A くんの優勝を期待している。→「A くんなら優勝できるはず」とＢくんも太鼓判を押す。努力を惜しまず毎朝走る A くん。「頂点をめざす」と、闘志を燃やした。

オ　人や物事について知らなくても、好奇心があればある程度は理解でき知識も自然と身に付くものである。人や物事を知らないことは恥ずかしいことではなく、知らないことをそのままにしておくことが恥ずかしい事だと学んだ。どんなことでも興味をもって調べていくと、奥深くおもしろいことを知った。好奇心を持って取り組む姿勢は、生徒を理解する時にも必要であると思った。

カ　時間の許す限り読み直した方が良い文章になる。書いたら少し時間をおいてから読み返すと訂正箇所を見付けやすい。

キ　正確な文章は信頼のもとである。何度もチェックし曖昧さを残さない。思いこみで書かず、曖昧なことは必ず確認する。新聞社では、名前などの間違いは上司に報告書を提出しなければならないほど厳しいものである。

② 写真の撮り方

写真は文章よりも読み手に鮮烈なイメージを与える。できれば一眼レフカメラを使うとより効果的な写真が撮れるが、普通のデジタルコンパクトカメラでも工夫次第でよい写真が撮れる。

【写真の撮り方（研修を通して学んだこと】

ア　人の表情を入れる
イ　アップや引き、下からや上からとアングルを工夫する
ウ　逆光を避ける
エ　トリミング（撮った写真のいらない部分を切り落とす）をする

ア　作品展では見学者、スポーツではチームメイトや観戦者などを写真の中に入れる。人の表情や動きを通して読み手にその場の様子を伝える。野球でホームランを打った選手がベンチに戻ってくる場面では、主役のアップよりチームメイトを写す方が雰囲気が伝わる（図９）。作品展は、作品と来場者を一緒に撮ることで、作品の大きさや会場の雰囲気を伝える（図 10）。

図９　周囲の人の様子を写し、その場の雰囲気を伝える

イ　講演会や体育館での催し物は、演者の表情や手の動きに注意し、タイトル看板などあればバランスよく入れる。全体の様子を伝えるには、斜め 45 度の高い位置から撮影する（図 11・12）。

図11 舞台後方の高い位置から撮影し、来場者の様子を伝える

図12 会場後方の高い位置から撮影し、舞台全体の様子を伝える

図10 作品と来場者を一緒に撮り、作品の大きさを伝える

対象の迫力を伝えたい時はアップ（図 13）。人物を撮るときは、対象者が和らいだ表情を見せたときや撮影で緊張していないときに撮るのがベストである。ピントは目に合わせる。

図13 アップで迫力を出す

集合写真は高い位置から撮ると全員の顔が写りやすい。声を出してもらったり、ポーズをとってもらうと表情が生き生きしてくる（図 14）。

図14 高い位置から撮り、顔を写す

動きのある人の表情を撮るのも、高い位置や低い位置から撮るとよい。例えば、陸上のマラソン写真はコーナーを曲がり始める場面を低い位置から撮るのがベストアングル。多くの選手を撮ることができ、選手が重ならないので顔の表情も写せる。バックに観客席を入れると大会の雰囲気も伝えられる（図 15）。

図15 できる限り選手の顔を写す

どうやったら効果的な写真が撮れるかいろいろ動いてみたり、対象への感動やハイライトのポイントを感じて撮ると写真が変わってくる。

ウ　太陽や窓を背にして撮り、逆光を避ける。

エ　画像ソフトを使ってトリミングすると、撮りたい対象の位置がよくなり迫力が増す。また、写

真の広がり感も出てくる。トリミングのポイントは見る人に画面の外をどうイメージさせるか、写っていない部分をどう見せるかである（図 16 → 17）。

さらに画像ソフトの画像自動調整機能を使うと撮った写真が一段と綺麗になる。

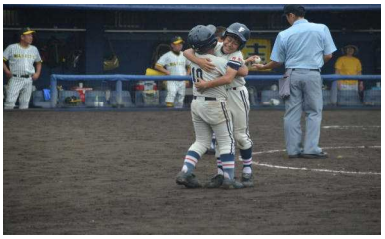

図16 学童野球、喜ぶ選手（元）

画像ソフトを使ってトリミングすると

図17 迫力が増す

（３）通信づくりの留意点

子どもや保護者が楽しみにする通信にしたい。そのための留意点を以下にあげる。

①否定的な内容や注文ばかりにならないようにする。子どもへの課題や家庭へのお願い事だけでは逆効果。

②子どもの作品や顔写真などを掲載するときは、あらかじめ保護者や本人に了解を得る。

③掲載が特定の子どもに偏らないようにする。

④計画的、継続的な発行に心がける。発行できない、うまくつくれなくてもくじけない。失敗から学び、常に邁進する気持があれば必ず力となる。

⑤負担が増えないように効率よくつくる。

Ⅲ　まとめ

１　上毛新聞社における研修について

子どもや保護者が楽しみにし、喜んでくれる通信をつくりたいと臨んだ1年間の研修であった。上手な文章の書き方やいい写真を撮るにはどうしたらよいかと課題を持って取り組んだ。その答えは、「毎日新聞をよく読むことだ」と記者から教わった。分かりやすい文章や完成度の高い写真に数多く触れることが上達への近道である。これからも新聞を手本とし、教育的な視点に立ちながら現場での業務をより効果的に進めるよう精進して行きたい。

６月から運動部に所属していたが、時間があるときは写真部や紙面レイアウトをする編集部に行き学ばせてもらった。どの部署でも研修に対して大変協力的で、親切に様々なことを教えていただいた。また、新聞社の方々と一緒に働きながら、仕事をする上で大事なことを多く学べた。大変貴重な体験をさせてもらい、感謝の念に堪えない。

２　学校教育での活用について

研修中に記事の書き方や写真の撮り方など詳しく教わった。目から鱗で学校現場でもすぐに活用できるテクニックが多くあった。紙面の都合で掲載しきれないため、資料編をつくったので是非読んでほしい。特に記事を書くポイントは、記者の方々が日々心がけていることをまとめたので、通信に限らず文章を書くときの参考になると考える。

今後、上毛新聞社で学んだことを生かして子どもや保護者から喜ばれる通信づくりをはじめ、教師、子ども、保護者の絆を深める教育に邁進していきたいと思う。

＜参考文献＞　　・『記者ハンドブック』共同通信社発行（２０１０）